

中だが、チェンジは期待できそうもない。

それよりも、低所得者のための公的医療保険（メディケイド）が州の予算削減と加入者増加で、おかしくなっている。また、プライマリケア（初期診療）の医師の不足で医者にかかりにくい。結局は医療保険会社の利益になる改革案になるだろうという著者の予想が当る気がする。薬の会社などから多額の献金を受けているオバマ政権と議会に大きな改革は期待できないというのである。

最後の章は、アメリカの刑務所の実状である。発展途上国よりも低賃金ゆえに、一大労働市場と化している。電話の交換業務が刑務所内で行なわれる。入所と同時に借金を負う等、日本では考えられないその実状が民営刑務所とともに記せられている。

本書を読めば、アメリカは大きく病んでおり、確実に社会は崩れつつあることがわかる。

（経済学／いとう・みつはる）

しいだろう。

同時代の旅行記その他の資料を博搜して的確なエピソードを拾い出してくる著者の手腕は、前作『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）で凄みを感じさせるほどに発揮されていたが、それは本書でも同じこと。

蝦夷地を統治していた松前藩主は、江戸城中で「蝦夷大王」と呼ばれていた。仙台侯が薩摩の島津重豪を客に呼んだとき、松前藩主道広が同席していた。それを知って薩摩侯は「はは、蝦夷大王だの」といった。つまりこの言葉には軽蔑（けいべつ）とからかいがこめられていたわけだ。そこから松前藩というきわめて特殊な藩が説明されてゆく。

松前藩は一万石格だけれど、石高制がない。米が藩成立の基盤にない。そのかわりに、商（あきない）場知行制なるものがあった。アイヌとの交易地点を商場と呼び、その場所を藩主も持ったし家臣にも知行として与えた。そこで藩全体が限りなく商人に近くなるという「何とも面妖な侍のありかた」が出現した。

しかし、著者はその「面妖さ」を否定的にとらえているわけではない。アイヌとの交易による利益が、侍の生活基盤になる。とすればアイヌから一方的に搾取しては

湯川 豊 評

2010・3・14

『黒船前夜 ロシア・アイヌ・日本の三国志』

渡辺京二 著（洋泉社）

●蝦夷地で展開する「歴史という物語」

扱われているテーマがめずらしい。「ロシア・アイヌ・日本の三国志」という副題が示唆するように、江戸時代の日露交渉史であり、その主要舞台は蝦夷地（えぞち）だから先住民であるアイヌが絡んでくる。十七世紀初めから十九世紀初めまで、およそは時間の流れに沿った展開だけれど、整然とそうなっているわけではない。

エピソードが積み重ねられ、登場人物たちが生き生きと動き出すのを追っていくうちにいつのまにか時が流れて、すなわち歴史がつくられてゆく。そういう書き方は教科書的な歴史の本からは大きく外れている。渡辺京二氏自身が「あとがき」で用いている「歴史という物語」という言葉が、この本の特徴をいうのにいちばんふさわ

生活が成り立たなくなる。現に「蝦夷大王」松前氏は、アイヌを領民として支配したのではないし、貢租を取り立てたのでもなかった。

そして松前には想像外の富が蓄積され、城下は華美なほどに繁栄した。秋田、津軽の貧窮地帯を通って福山に至った旅行者にはそれが驚くべきことで、大旅行家の古河（こしか）松軒（まつののり）は、「上々国の風俗」と絶賛している（『東遊雑記』）。松前藩といえばアイヌからの収奪という図式が間違っているのだ。

このような松前藩のありかたは、その背後にある江戸幕府とともに、領土意識がないという点で驚くべきことだ、と渡辺氏は指摘する。この度はずれたのんきさが修正されるのは、一七九九年、東蝦夷地を幕府直轄とした頃からで、近世のナショナリズムがようやく擡頭（たいてう）してきたからだ。その背景には東蝦夷地へのロシア人の度重なる来航があった。

とはいえ、ロシアの通商の迫りかたも、どこか間のぬけたところがある。

シベリア、カムチャツカ、さらにはアラスカの開發經營のためには、日本と通商して水、食料などを得ることが必須の条件である。それは明らかだとしても、ロシア

皇帝たちが国策として推進しようとしたのではない。ヨーロッパ情勢への対応に追われたりして、対日政策は一貫していず、北辺の地に利益を見た個人が宮廷を動かしながら活動した。

しかしアレクサンドル一世が肩入れしたレザーノフあたりから、ようすが少しずつ改まった。レザーノフは一八〇四年に長崎に来航し、幕府に通商を迫る。六カ月待たされたあげく、申し出は拒否されるのだが、レザーノフ自身はかなり風変わりな人間だった。退去せざるを得なくなったときでも、「顔色自若」だった、と幕吏が記録している。

この幕吏は誰あろう狂歌師として名高い大田南畝で、一時的にまじめに働いた時期があつて、役人として長崎に来ていたのである。

次に来た大物はゴローヴニン。一八一一年にクナシリ島で捕えられ、二年三カ月ものあいだ、松前、箱館に幽囚の身となった。そしてゴローヴニン解放に力を尽したのが、かの高田屋嘉兵衛。農民出の船乗りで、日本有数の豪商となった男の時代認識の透徹、胸がすくような豪胆な行動力が実証的に手堅く語られる。

この「歴史という物語」は、エピソードを巧妙に積み

重ねるという手法で語られている、と先に書いた。とはいっても、エピソードを貫く史観がないという意味ではない。

ロシア人の来航に対処する江戸幕府の卑怯にも見える事なかれ主義をいたずらに嘲笑すべきではない、と渡辺氏は主張する。徳川国家は強大な軍事力を背景に出発しながら、十九世紀初頭には、武力衝突を避け、平和的解決を重んじる社会をつくり出していった。それは少しも恥ずべきことではない、という。このようにイデオロギーに汚染されていない、したたかな史眼が随所に光っている。それこそがこの「歴史という物語」の源泉なのである。

（文芸／ゆかわ・ゆたか）

小島ゆかり 評

2010・3・28

『亀が鳴く国』 日本の風土と詩歌

中西進 著（角川学芸ブックス）

●日本の春、朦朧とした空気に響く声

「亀が鳴く」とはどういうことか。俳人にとっては見慣れた春の季語であるが、そうでない者にとっては、謎かけのような言葉だ。

亀には声帯、鳴管、声嚢などの発声器官がないから、鳴くはずはない（かすかな声を出すことはあるという）。「亀鳴く」は、「河越しのみちの長路の夕闇に何ぞと聞けば亀の鳴くなる」（『夫木和歌抄』）を基としたと思われる架空の季語である。『夫木和歌抄』は鎌倉時代の私撰類題和歌集。

春の夕暮れや夜など、朦朧とした空気のなかに何ともしれぬ声が聞こえるのを「亀鳴く」とした。俳諧の遊び心が生み出した季語だと言つてよいだろう。

いったい、だれがいつ、亀が鳴くなどと言い出したのか。さらに、それに悪乗りして季語とさえ認定したのはいつのだれだ。歳時記によると、亀は春鳴くことになっている。なぜ春か、それらはいっさい不明のままに、現代にいたるまで、俳句はむしろ喜んで、亀の鳴く句を作っているように見える。（中略）先人は亀

の鳴く風情を、人生のいかなる一齣にとりなしたか。

亀鳴くやひとりとなれば意地も抜け

先年なくなった鈴木真砂女の句。わたしは、やはりエアポケットだと思つてしまう。作者の切った張ったの生業の潮がさあつと引いた時に亀は鳴き声をとどけてくれる。

亀鳴いて椿山荘に椿なし

菅 裸馬

亀鳴くや小説どれもおなじ型

高崎梨郷

これらも、みんな意地が抜けているのがおもしろい。椿山荘というからには椿があふれていて然るべきなのに、椿がないと椿事だ。拍子抜けする、その息の抜き方に亀はのりこんで来る。（中略）人生の閑。よきかな亀の鳴き声。それでいて、みんなウソだ。それがまたよい。

（俳句の虚）

内容にふさわしいテンポと呼吸。中西進の文章を読む楽しみは、テーマごとの独創性や深さやおもしろさに加えて、内容を生かす文章の書き方がいかにも自然に選ばれていることだ。本書もむろん、その緩急にぐんぐん引き込まれながら、いつの間にか詩歌の本質へと導かれて

たとえば現在、地球の年齢は四十億歳とか、五十億歳といわれています。それが受け入れられているのは否定するような証拠が出ていないからで、何か新しい証拠が出ればいくらでも変わってしまうでしょう。

それは、理系の自然科学の話だけではありません。かつて江戸時代の農村といえば、民衆が貧しい暮らしをしていた時代と思われていました。しかし最近の研究では、自治のシステムが整い、比較的平等な富の分配が行なわれ、貧富の差があまりない経済的に豊かな社会であったことがわかっています。

とくに江戸時代から明治初期にかけて来日した外国人の目を通して当時の社会を描いた、渡辺京二さんの『逝きし世の面影』（葦書房）という本では、欧米人が当時の民衆の生活を見て「衣食住が豊かである」という証言を多くしていることを指摘しています。

新しい論拠が出てくれば、定説というのはいくらでも変わるのです。

教科書に載せられているような科学的真実というものも、往々にして、実は暫定的なものに過ぎません。どのような命題も、今は絶対的真理だと思えても「いまのところ、間違いないように見える」とか、「法律的には、現在はこっちが正しい」とか、「多数の人が現在はこちらを採用している」という暫定的なものなのです。

そうすると私たちは、科学的な真実にしろ、一般的に「正しい」と受け止められていることにしろ、常に「検証する」という態度をもっていないわけではありません。しかし検証する前に重要なのは、やはり何度もうのように「それを疑いの目をもって見られるか」ということ。同質性が高く多数の意見が絶対的なものになりやすい日本で、「常識となっていることに疑問をもつ」ということは難しいかもしれませんが、どうしても必要なことなのです。

文化の共同体としての民族といった感性的な存在に置き換えようとする見方が、すでにヘルダーのような人文主義的な民族主義者によって早くから唱えられていたということです。しかし、美しい風土、美しい言語、美しい文化の共同体が、そのまま国民になるわけではありません。そのためには、一定の政治的意志をもって国家を形成し、その憲法体制（コンスティテューション）を通じて国民の共通の課題や利益（公共の福祉）の達成を図ろうとする国民に「なる」必要があるのです。それは、社会契約論にみられるように、一定の作為（フィクション）による政治的空間の形成を不可欠としています。そして憲法は、まさしくそのような作為的な営為を通じて形成される国家の基本的なルールを意味しているのです。この意味で、「立憲主義は人間の本性に反している」（長谷部恭男『憲法とは何か』）と言えます。なぜなら、それは、公私が融合した感性的な存在とは反対に、私的なものと公的なものを切り分け、多元的な価値が共存して国民社会を営むことができるようにする仕組みに他ならないからです。

こうしてみると、国と言っても、それは「自然」（感性）と「作為」のふたつの世界に軸足を置いていることがわかるはずです。

よく日本の自然の美しさと、それによってはぐくまれた感受性や文学的な情趣という点

で日本人に勝る国民はいないと自慢げに語る人がいます。しかし、そうした人たちに限って「政治音痴」というか、啞然とするほど他国民との共存に必要な政治的技量や知恵に乏しいようです。明らかに、強烈な「日本人（民族＝エトノス）意識」をもっているがら、自由民主主義（リベラルデモクラシー）の絶えざる「作為」を通じて形成される国民意識を欠いているのです。このちぐはぐな不均衡が、国を愛することや愛国心にどのような相貌を押しつけることになるのか、この点は第四章で詳しく取り上げることになります。

愛することは技術である

いずれにしても、愛国心の対象である国といっても、それが「自然」と「作為」のふたつの世界にまたがっている以上、国を愛することが感情の問題だけに尽きないことは明らかです。そしてまた「愛する」ということも、感情の問題だけではすまされないのです。この点を社会心理学者のエーリッヒ・フロムの『愛すること』にそってみてみましょう。

フロムがこの本の扉に引用しているルネサンス期スイスの医化学者パラケルススの言葉が、「愛するということ」の意味を簡潔に言い尽くしています。

何も知らない者は何も愛せない。何もできない者は何も理解できない。何も理解できない者は生きている価値がない。だが、理解できる者は愛し、気づき、見る。……ある物に、より多くの知識がそなわっていれば、それだけ愛は大きくなる。

このパラケルススの言葉にあるように、愛するということは、生きることが技術であるのと同じように、ひとつの技術なのです。愛することが技術である以上、技術は習得されなければなりません。そしてその習得の過程は、理論と習練のふたつの部分から成り立っています。当たり前のことですが、理論的な知識と理解力を深め、実践的な試みを繰り返していくことで自分なりの直感が得られるようになるのです。

国を愛することや愛国心もこのプロセスを踏んでいく必要があるはずです。

もつとも、愛すると言っても、国は自由を選ぶわけではありません（もちろん、国籍の離脱と新たな国籍の取得によって国を選ぶことは不可能ではありません）。したがって「日本語という言葉で私はこの国に結びつけられている。その結びつきを愛というのなら、愛とはおよそ運命の異名である」（渡辺京二「直き心の日本」『文藝春秋』特別版、前掲）という言い

方もあながち誇張ではありません。評論家の小林秀雄ならば、この「運命」を「国語といふ巨大な母胎」（小林秀雄『本居宣長 補記』）と言うはずです。つまり日本人とは、「国語といふ巨大な母胎」にくるまれ、それによってはじめて自らの心の自己表現を達成できる民族のことなのです。

孤立感を癒すマゾヒズム

だが、こうした母親と胎児の関係になぞらえられる結合関係は、フロムに言わせれば、「未成熟な形の愛」を意味しています。そのような愛をフロムは「共棲的結合」と呼び、その受動的な形態を「服従」の関係であると指摘しました。臨床用語でいう「マゾヒズム」の問題です。

神であれ、祖国であれ、国語であれ、文化であれ、マゾヒスティックな人は、それらの偉大さや力、確実さや審美的な価値の一部であることに「運命的な」意味を見いだし、孤立感を癒すことができます。確かにそうした人は決してひとりぼっちではない。人間の最も強い欲求が、孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出すことにあるとすれば、マゾヒスティックな人は、融合しているという満足感に満たされています。

ない。

「いや、ちょっと会って、名前も聞かないで別れたんです」という。まいったな。名前も聞かなかったのかよ。「ダメじゃないかー バカーー そいつが俺の息子だよー」と叫んでしまった。

日本が戦争に負けて、満州から逃げ帰った時、父子はバラバラになった。生き別れになった。その後、子供は中国人に育てられ、鉄工所の技師になった。パレスチナで、その消息が分かり、やっと父子対面ができるというのにと涙ぐんだ。あれっ、これは山崎豊子の『大地の子』か。そんなわけはないやね。

でも、昔、つき合っていて、今でも僕の著作物の全てを持ってるなんて、誰だろう。その謎を解明する機会はず永遠に失われた。パレスチナの砂漠に消えた。惜しい話だ。

しかし、その母親は、「こいつが、鈴木邦男よ。お母さんが昔、つき合ってたのよ」なんて息子に語ったのだろうか。「ミライ」を見てる時も。「偉そうなことを言ってるけど、学生時代は臆病だったのよ。左翼にはいつも殴られてたし。お母さんが、だから、ハッパをかけてやったのよ。ひるむな！ 闘えーッ って」。「決戦の前は、いつも恐がって震えていたわ。お母さんの胸で、泣いていたのよ」なんて。いやだなー、そんなことを言われちゃ。

話は変わる。ようやく、長い夏休みも終わり、学校も始まった。九月一日（木）が河合塾コスモ（大検コースの予備校）の第一回目の授業だった。

コスモで、「基礎教養ゼミ」（読書ゼミ）の授業のときだった。ここでは、ひたすら皆で本を読み合う。そして喋る。そんなゼミだ。牧野剛先生と僕が一週交替で、本を選ぶ。この日は、牧野先生の担当だった。渡辺京二さんの『世界史は成立するか』という本がテキストだ。渡辺さんが河合塾で講演したのをまとめた本だ。この日は、コスモ生だけでなく、OBや大学生、社会人も多かった。OGで、今年から和光大学に行っている生徒が読んだ。

その中で、「石原保徳の犠牲者の歴史」という章があった。「犠牲者」「被抑圧者」の側に立って歴史を見る人だ。『インディアンが発見』とか『世界史の発見』という本を出したという。そして、こんな文があった。

「岩波書店の編集部にいた人なのですが、岩波やめてからどこか、和光大学の先生になってるらしいのですが……」聞いている皆も驚いたが、読んでいる本人（和光大生）も驚いた。突然、自分の学校が出てきたからだ。さらに、もう少し読み進めたら、何と、「レコンキスタ」が出てきた。それも何度も何度も詳しく。凄い。本の方からどんどんと我々の方に飛び込んでくる。本は生きているんだ。

▼7 赤報隊事件 「日本民族独立義勇軍別動赤報隊」と名乗る集団が起こした一連のテロ事件。87年に朝日新聞東京本社、阪神支局、名古屋本社寮が銃撃される。2002年時効成立。
▼8 田中宇（1961-）フリージャーナリスト、国際情勢解説者。著書に『非米同盟』『イラク』など。

まるで、『ネバー・エンディング・ストーリー』じゃないかと思った。ミヒヤエル・エンデの小説だが、いじめられた子の少年が、図書館で本を読んでいる。そうすると、何と、その本の中に、自分の名前が出てくる。そして、本の世界に飛び込み、大活躍をする。自分が本の世界に引き込まれるのか、本の世界が現実に出てきて、この世を物語化するのか。不思議なファンタジーだ。

だから、このゼミの時、私は言った。「三〇年前に一水会を作ったんですが、その時の機関紙の名前が『レコンキスタ』なんです」と。

一水会というのは、第一水曜からとただただ。決して、「水盃をして、国の為に死ぬんだ」という大それた気持ちでつけたんじゃない。でも、「レコンキスタ」は、考えに考え抜いて、大それた動機でつけた。「愛国」「憂国」「反共」……なんて言葉は使わないで、オシャレなタイトルにしようと思った。その時、昔、世界史で習った、スペインのレコンキスタ運動を思い出した。イスラムの侵攻から祖国を守った、救国運動だ。うん、これがいいと思った。

だから、「RECONQUISTA」と題字も横文字にした。元々の意味はこうだ。REは「再び」だ。CONQUISTAは英語ならconquestだ。「征服・支配」という意味だ。だから、RECONQUISTAは「再征服」、あるいは「失地回復」と訳される。この後者の「失地回復」が気に入った。

日本は戦争に負けて、領土を失い、さらに、心（精神）も失った。僕も子供と生き別れになった。これを取り戻すのだ。そういう気概を込めて、つけたのだ。でも三〇年たって、マズイことが起こった。一水会の人達がイラクに何度も行き、共に闘っている。イスラムの人々と同志になっている。その時、新聞名が「レコンキスタ」ではマズイ。イスラムと闘う名前だ。じゃ、改名するか。いっそ、「ジハード（聖戦）」にしようか、という意見もある。

というわけで、団体名や機関紙名を考える時は、じっくり考えて、長い目で見て決めましょう、という教訓だ。「ミライ」では鶴瓶さんに、「四〇年も運動やってて、どうして貧乏なの？」と聞かれた。右翼といったら、壮大な家に住んで、若い衆がゴロゴロしていて、「おやっさん！」と出迎える。そんなイメージを持っていたんですな。TVを見て電話してきたオバさんにも言われた。「そんなに本を出して、どうして六畳一間のアパート暮らしなんですか？」。しょうがないだろう。貧乏なんだから。ホームページのよう、タダの原稿ばかり書いてるし。

しかし、世の中の人は、「右翼」といったら、即「ヤクザ」だと思うし、「こわい」「暴力」。でも「リッチ」と思いうらしい。まいるよね。

「ミライ」放映の翌日だった。「テレビ見たで。よかった

▼9 牧野剛（1945-）予備校講師。カリスマ「現代文」講師として名高い。若い頃はバリバリの新左翼活動家だった。著書に『河合塾牧野流！国語トレーニング』など。
▼10 渡辺京二（1930-）近代史家、評論家。河合塾福岡校講師。主な著書に『逝きし世の面影』『江戸という幻影』。
▼11 ぼくも子供と生き別れになった だから、それは小説ですって。

ると思います。駅を降りて街に出ればサラ金とパチンコ屋は必ずある。寄生的な金融資本の末端につながり、あとはサービス業で、これは中間搾取の蛆虫うしむしみたいなものだ、と。ヒトラーはユダヤ人をそう言ったわけです。在日について何となくそういうイメージがあるんじゃないでしょうか。

それを網野さんに話したら、「姜さん、その通りだよ。僕が批判したいのは、日本社会では土地を持っているやつが偉くて、土地を持たないのはカスと見なされていることだ。自分がずっとやってきたのは、百姓は農民じゃないということだ。『百姓』を農民にしてしまったところに、中世以来の歴史観の誤りがある」と言うんですね。つまり非農業民への着目ですね。

佐高 そっちのほうが百姓だ、と。

姜 そうなんです。百姓というのはもっと大きいんだ、と。ところが中世以降の支配的な日本の歴史観は、言ってみれば、土地を物神化するというんでしょうか、僕はその時に、マルクスを使って「土地フェティシズム」と言ったら、網野さんはすぐわかってくれた。「大塚さんがウェーバーを換骨奪胎している背景にあるのは、居場所がわかって、氏素性がわかって、土地を持って生きている人間だけが偉い、それ以外のやつはいかがわしいんだという、僕の考えでは、かなり新しい歴史観だ」と言うわけです。僕は癒いされたような感じがして、だんだんウェーバーから距離感を持つようになりました。大塚さんに対して、以前からインドの非農業民についての研究者からの批判が出ていたんですね。そのあ

たりから僕は、ちょっとしたものの見方が変わったんです。そうしたら最近、移動する人に脚光が……。

佐高 移動民というか、難民や流民も含めてね。

姜 そうそう。歴史を見る時に、どういう視点から見なのか、ということですよ。

ただ、非農業民の側から歴史をとらえると、今度は逆に、農業を営んでいる土着民に対する見方がどうしてもネガティブになってしまうから、その点で、熊本の渡辺京二さんが網野さんを批判したんですよ。彼は農本主義的なところがあるから。

佐高 宮崎滔天ミヤザキトウテン的なね。

姜 それで僕もまた、ちょっと揺れ動いているんですけれども。

「怠ける権利」―マルクス主義の生産性重視への痛撃

佐高 でも、土地フェティシズムを相対化する必要は絶対にありますよね。私が学校を出て最初に勤めたのが庄内農業高校なんです。私はその頃は借家に住んでたんですね。土地を持たないどころか、家持たずなんです。あのへんで「家持たず」という言い方があるんです。彼らに言わせると「家持たずが子どもと遊んでお金をもらってる」ということになる。学校の先生なんていい気なものだ、と。まして家持たずで、また私は余計な教育をしているわけでしょう（笑）。親はほとんど、自民党の支部長みたいなものばかりですよ。

そうすると、ポール・ラファルグの『怠ける権利』というのは本当に衝撃なんですよね。私は三二歳で出した最初の本にラファルグを引用しているんです。あれば痛烈なマルクス批判ですね。ラファルグは、マルクスにとっては、とんでもない娘婿だったんですね。ラファルグは、労働というのは進歩の長子であって、それこそを排撃しなければならぬ、みたいなことを言う。ラッセルが『怠惰への讃歌』を書くのは、たぶんそのあとでしょう。極端に言えば、落語の与太郎の話ですよね。

姜 三年寝太郎とか。

佐高 「働けば楽になれる」と言われて、「今もう寝ている」と答えるという。当時は、それを笑い話にできない空気がありました。左翼の方も、そういうゆとりのあるものの見方を封じ込めてしまった。

姜 そういう生真面目人間が後に、佐高さんが言う社畜になってしまおうと思うんです。生産性を営まない人間はカスだという考え方は、どこかで僕も人生訓として親から教わっている。「あれは働かずに、よか身分たい」という言い方は、地方都市ではよくありますよね。その裏側には、労働していかないことに対する批判があるわけです。日本の場合、これだけの人々が社畜になっていくとか、三万人も自殺者が出るといふことの奥には、生産性のない人間とみなされることは全人格を否定されたに等しいという感覚があるんだと思う。大塚さんのウェーバーを読んでいる時は、みんな刻苦勉励にはげんでいた。ところが人々は、間違いない、勤勉節約とは逆の、快楽や感性的な解放を求める方向に動いていた

私は県教委に投書されたんですよ。教科書を使わないで妙な授業をしているということで、校長から呼ばれてね。そういう小さな諍い(いさか)をやっていたんですが、土地フェティシズムの根深い強固さが保守をつくる地盤だということは、身に沁みて体験してきているわけです。さきほども話に出た、丸山さんの有名な「土屋は青ざめ、古島は泣き、そうしてゲージングは哄笑する」ですか？ そうしたら、極端なことを言うところ「ちゃんとしたファシズムならいいのかよ」ということになるわけですね。日本型ファシズムよりはナチのほうが優れていたと……。

姜 解釈されかねないですね。

佐高 だから、「ちゃんとした」というのは何なんだ、ということをお問ねねならない。

姜さんがウェーバーから離れた経緯は非常によくわかりました。私はマルクスをかじりもしないで唾(つば)をつけたぐらいの話なので、私自身にはマルクス主義を相対化する切実な動機はあまりないんですが、マルクスの娘婿(むこ)のポール・ラファルグが『怠ける権利』というのを書くわけでしょう。あれはマルクス主義にとってはものすごい衝撃なんですよね。門脇厚司が『遊びの社会学』とかいって、井上俊さんなんかと遊びの研究を一生懸命やるわけです。例の、有閑階級の理論……。

姜 ヲウェブレンの？

佐高 ヲウェブレンやミルズやパーソンズを、自分だけで読んでいけばいいものを、私にもすすめるものだから(笑)、私も一時期、見田宗介(むねすけ)なんかを一生懸命読んでいたわけです。

る、すべて、汚辱も含めて、破滅も含めて、そういったものを浄化し、魂の問題として提示するとき、能のような形式でしか表現し得ないというところまで思い詰めた⁽⁷⁾のである。

しかし、ここでいう「言葉の限界を超える」とは、ただ音楽や舞を含めた総合芸術へ向かうという、たんなる表現様式の拡大にとどまるものではない。石牟礼の脱近代知のひとつである「歴史意識」という視点からいえば、この能形式の採用は、石牟礼における時空を超える歴史意識と不可分であった。なぜなら、能を含む芸能は本来、「過去を回想する力」や、「人間の一生を観返す力」をもっているからである⁽⁸⁾。言い換えれば、この能という様式は、「死から遡行」し、「そして、死の寸前に凝縮する濃密な時間の構造を持つ⁽⁹⁾」っており、つまり歴史の凝縮点としての現在から人類史をかえりみる「不知火」という思想劇にふさわしいものだったのである。

③近代の認識論を超えて——新しい文学と科学——

石牟礼の著作の特徴でもある身体的表現は「不知火」においても多く見られ、それがこの神話的作品に独特のリアリティを与えている。たとえば、「不知火」を貫く、「なつかしき島の香り」、「波の間の橘の香」および「反魂香⁽¹⁰⁾」の香といった嗅覚やその他、聴覚、視覚、さらには、次のような触覚などの五感に訴える身体感覚表現が有効に用いられている。

クロスA・B 「……いま磯辺^{いそべ}の石^{いし}を踏む。あしのうらかそかに痛み^{こんじょう}今生の名残^{なごり}かな。」

今生の名残として磯辺の石の「かそかに痛み」感触を通して、彼岸と現世の間をかそかに、しかし確実に繋ぐリアリティが、ここにある。

このような身体的表現は、具体性と象徴性とに深く関わっている。つまり、このテーマは、B・ウイラーによるワーズワスの「自然」理解や、コールリッジの理念論^{イデア}における、具体と普遍を繋ぐ「象徴」の理解のように、近代の認識論や言語の抽象性を超えようとしたロマン主義者たちの課題でもあった。それは、デカルト以来の近代の機械論的・因果論的で主客二元論的な認識ではなく、たとえば自然という認識対象と同質でその一部である（石牟礼によれば「人間そのものが、手つかずの自然……究極の自然⁽¹¹⁾」なのである）人間による自然認識や表現はどのようにして可能かという問題である。

こうした近代の認識論を超える石牟礼にとっての「認識」とは、渡辺京二によれば、「自分が外界の中に入り込んで」、その主客の相互浸透によってできる「場」に無数にそよぐ「感覚的触手」のようなものであって、そこでは対象を「認識」するというより、全体的な場を「感知」するという方が適当である⁽¹²⁾。これこそ、機械論的認識を突破する脱近代の全体的で生きたリアルな認識であって、生命論や複雑系におけるような現代の科学思想の新しい方向性とも合致する哲学であり文学である。それは、近代の認識論やひろく近代知によって失われた全体性、複雑性、関係性、多様性、内発性、つまりは石牟礼における脱近代の知の創出を示すものである⁽¹³⁾。その意味で石牟礼文学は、現代の科学や知のパラダイム転換の先端に位置するものであって、この点でも石牟礼は、新しい認識や科学への志向性をもった、たとえばコールリッジ、シェリーおよびノヴァーリスといったロマン主義者たちの方

かに出ていった兵隊さんのお墓石が立っている村を通ったことがあります。そして、どここの誰々で、誰の息子で、どこどこで戦死したと書いてあるの。そのお墓石が、半分倒れていました。今道路が近くを通っているので、土地が削られて墓が傾いていました。兵隊さんの姿も、家も村も寂れてますが、惜しい若者を死なせてしまったなあ、という嘆きの気持ちで、お墓石をつくっていたんだと思います。村が、一人の若者を慈しんでいた時代の名残がお墓石にあるわけです。今の村に、その若者たちの姿が見えるでしょうか。「そういえば、おったかなあ」とか、あるいは「知らんばい。全然」という具合でしょう。そういう思いの深さが村の隅々まで届くような日本に帰れないかしらと私は思います。やっぱりそれには、自然対自然というようなのが、絆の帯のような役目をしていたんじゃないかと思うんですよ。草がそよいでいる音、風が運んでくれ、季節の香りというようなものも、平等に来てるんですけども、それがあまり感じられなくなってるのではないのでしょうか。そのように、人間の心や魂と、自然の感触というのが一体になったとき、私たちの気持ちも体も甦るのではないかという気がします。ですが、なかなか無理かもしれないなと思っています。

岩岡 つい三〇年前まではそれがあつたわけです。そういうまなざし、感触、一体感、そういったものが、特に、この狂乱の三〇年、一世代のうちに、あつという間になくなってしまった。これを甦らせるには、まなざしの向きを変えるとか、心の向きを変えるとか、そういうことしかないのかもしれないね。

◆自然と人間

石牟礼 俳句の方々には、四季というか、季語、季題というのがございますね。

岩岡 ええ。私は渡辺京二さんから色々教えていただいたことの中に、人間と人間との絆の回復は、自然への畏敬を通して、つまり人間レベルよりもっと大きな畏敬を通してしかできないのではないかなということがあります。俳句をやっているからというわけではありませんが、そういうことに関して、少しは敏感になります。

特に、私は、自分で言葉を構成し一つの世界をつくりあげるといふ、いわば近代的な俳句とは全然違うところから、俳句に接近しています。つまりそれが高浜虚子以来の伝統俳句なのですが、どうしたら自然に近づいてこれと一体化するかということを考えています。これを「花鳥諷詠」とかいいますと、なんだか、古い俳句の代名詞みたいに言われまして、ずいぶん苦労しました。花鳥諷詠といいますと、「花鳥」は自然、造化ですね、それを諷詠する。まあ、いわゆる「近代」文学からすると、これは何だと。自我がないではないか。近代的自我はどうした、と。しかし、自然との距離を縮めてこれと一体化していく、さらには、私たちは自然の中の一部である、という作り方をしていくことは可能だし、そういうことが最も現代的ではないかと私は思うのです。ですから私は、伝統俳句が一番新しいとも言っています。古い古いといわれながら逆説的ですが、一周遅れのトップになったような具合ですけれども。

時間の制約がありますので、何か一言最後に、この作品を通して、石牟礼さんが最もおっしゃった

一郎邸に放火し全焼させるテロ事件が起こります。どうやら、河野の利権政治を撃ち、自民党との癒着を超えられぬ既成右翼をたしなめる目的でした。野村は懲役十二年をつとめあげた後、一九七七年、経団連事務局襲撃事件を起こします。

こうして、自民党、財界さらにはアメリカの世界支配と対決できる反体制右翼がようやく戦後にも姿を現わしたのでした。こうした動きを、普通、新右翼、民族派と呼びます。

しかし、こうした運動は、新左翼と比べてもマイナーすぎました。そもそも、六〇年代以降、戦前の旧日本を懐かしみ、忠孝儉約耐乏の道徳や天皇至上主義と日本軍を復興させようと自然に思う層はもはや高齢化していました。新憲法とアメリカ的民主主義はそれなりに定着し、日米同盟と高度経済成長の下、豊かさを求める生き方は、すでに日本人大多数の共通了解でした。そしてその負の側面、民族独立の喪失、第三世界からの搾取、物質的豊かさ万能の企業社会を撃つ批判ならば、共産党など旧左翼、また新左翼がとくに放っていました。

今さら、天皇を掲げ、日本の伝統、民族の誇りを叫ぶ「反体制」勢力を支持しようと思う国民などほとんどいなかったでしょう。

結局、新右翼は、たとえばフランスの国民戦線（ルペン派）、ロシアのジリノフスキーのごとき大きな政治勢力へ育つことはなく、国民一般からは街宣車でアピールする旧右翼と変わらぬ連中と見られて終わるか、たまにスター性のある一水会代表（現顧問）鈴木邦男などがTV

の討論番組などで見せた強面のイロモノ的スタンスで知られるのみのマイナーな政治運動にとどまったのでした。

「新左翼」と「新右翼」の接点——土着革命の模索

もともと、欧米由来の自由主義、民主主義、そして社会主義、共産主義が、日本にそのまま輸入できないのではないかという根本的な疑問は、知的に誠実な「左翼」がすでにたびたび提起していたものでした。

なぜなら「左翼」は、民主主義でも社会主義でも、民衆のため、民衆に支持された革命、改革を目指します。しかし、その民衆が欧米的「個人」主義で生きてはいない、ムラ共同体、世間のなかに生きる人々である日本の場合どうすればよいのか。日本型の民主主義、社会主義はありうるのか。

そうした視点から、仏教や徳川時代の儒教、国学などのなかにある民衆重視の思想、体制変革の思想を発掘したり、明治維新の志士たちを研究したり、天理教、大本教など反体制的だった民衆宗教や、西郷隆盛、宮崎滔天、北一輝といった「右翼」とも「左翼」ともいえる革命思想家を再評価したり、日本の民衆や天皇の特徴を考えるため民俗学や文化人類学、宗教学の視座を取りいれたりする試みがなされたのです。吉本隆明・谷川雁・谷川健一・村上一郎・橋川

ざる者へ与える権力的処置を遂行し、計画経済による生産を軌道へ乗せるためにも、依然として、滅私奉公の全体主義的な倫理は主義者に要求されるでしょう。

新しい経済体制を建設するのだから、こうした厳しさは当然、必要というべきです。しかし、これがスターリン独裁体制や日本共産党の抑圧的体質の温床となり助長要因となったのも否定できません。

それゆえ「新左翼」は、さまざまなかたちでこうした没個性的な体質を批判しました。しかしです。滅私奉公の全体主義的倫理を否定した「新左翼」は、共産党のような大組織を築き上げられなかったし、ましてや革命を起こして国家権力を握り、新しい経済体制を樹立できそうな可能性など露ほども見せられませんでした。何しろ連合赤「軍」建設を謳ったところで、メンバーの私欲をまるで滅せられず、端から肅清してゆくほかなかったのですから。結局、彼らはあの『フランスの左翼』の著者ドフラヌが分類した「権力左翼」を批判したものの、自らは「反抗左翼」で終わったといえましょう。

この背景にはやはり時代の変化があります。「旧左翼」である共産党や労働組合のメンバーが育った戦前は、誰もがあまりに貧しく、学校で軍隊で職場で飢えにも過労にも禁欲にも滅私で耐える訓練ができていました。また経済的豊かさのためなら、辛い現在を耐え抜く覚悟もできたでしょう。しかし、ある程度の豊かさは知る「新左翼」の世代は、もう消費の楽しみもさ

文三・渡辺京二・松本健一・井出孫六・宮田登・梅原正紀・竹中労といった人々の仕事です。「新左翼」の行き詰まりを、こうした「土着」「地域共同体」へ根ざしたところから、アメリカをもソ連や共産党流の共産主義をも批判してゆく視点により突破してゆこうとする動きは、たとえば地方行政の改革とか有機農法など地元に即した環境運動の実践へ結びついてゆきます。その思想内容はどこか地域と農村という日本の伝統を重視する「新右翼」に接近してゆくようにも思います。

左翼はサヨクとなった——高度消費社会と思想のサブカルチャー化

「新左翼」「新右翼」が、一九六〇～七〇年代にかけて登場してからさらに十年を経た一九八三（昭和五十八）年、当時二十二歳の学生だった島田雅彦が、『優しいサヨクのための嬉遊曲』なる小説を發表します。これに注目した文芸評論家磯田光一は長編評論『左翼がサヨクになるとき』を書き上げました。

主に戦後日本の文学史を、題名通り「左翼」の変質を軸として論じた力作です。

かつて、「左翼」、特に社会主義者、共産主義者には、革命を勝利させるため、一種、軍隊的に強固で厳しい党の規律に服し、組織の歯車として私利私欲を滅して闘争へ邁進すべしという倫理がありました。革命が成就して、社会主義が建設される段階でも、持てる者から奪い持た

るかだ。それにしても少年たちの祖先は、大和朝廷騎馬民族説のように渡来した血が騒ぐのだろうか。

274

書評は消耗品ではない

関西にも良心的な小さな出版社の活動が目立ってきた。関西市民書房、アカデミア出版会、神戸っ子などきわめて少人数で本を出している。いまは出版社は東京に集まってしまっているが、江戸時代の版元、板許は三都仲間といって、大阪（当時の大坂）、京、そして江戸だった。

農家なんかの土蔵からよく出てくる江戸時代の出版物、今様にいえば「家庭医学大全」「農業百科」「育児法」などの奥付を見ると、発行書肆・大阪心齋橋通、秋田屋太右衛門とか、京都寺町通松原下ル勝村治右衛門などという名がみえる。

かつては京、大阪は一大出版センターであったのだ。それが明治以降、徐々に東京へ偏在してしまっただ。それが、いままた関西でたった一人か数人の同士で小さな出版社を興し、良い本を作っている。良い本は、どこで作ってもよい本だから私もせっせと買い込む。アカデミア出版会が発行した井上俊さんの評論集などおもしろかったものの一つだ。なかでも、井上さんが書き続けてきた書評を集め

た部分が楽しい。書評というのは、片手間と考えている人もいるが、著者と批評者のたいへんな出会いの産物である。

書評といえば最近思うことが多い。九州の、これも小さな出版社であるが、葦書房から渡辺京二さんが、書評だけ集めた一冊の評論集を出したと思ったら、色川大吉さんも大和書房から同様の本を出した。

色川さんはこの本の中で、「書評には好意的なものと、そうでないものがある。非好意的な書評をされた著者には反論権があるのではないか」と主張されているが、卓見である。

著者の弱さ、未熟さを指摘してくれる書評はありがたいが、悪意やいいかげんなものに接すると、批評者の人間性を疑ってしまう。

こんなことがあった。私はかつて、たった一人の出版社である百人社というところから、民衆史に関する本を出した。多くの温かい書評をいただいたが、ひどいものもあった。

神戸で歴史学を教えるFという人が週刊誌に書評を書いた。この人は、週刊誌と思って手をぬいたのか、本をななめに読んだのか、困った書評文だった。

私は明治期全体を対象にした民衆史を書いたのだが、彼は別のとらえ方をした。よく読んでいないためである。さらには森鷗村のことを森鷗外と同一人とみたり、群馬藤岡と栃木藤岡とを混同している。藤岡屋日記という江戸末期の有名な書物商の記録があるが、この人は群馬藤岡の出身だった。

そのことを聞きかじって、鷗村の住んだ下野藤岡と思い違いしたのだろうか、どちらも歴史家失格の誤りだ。週刊誌の書評だから手をぬいてよいというものでもない。どんな小さな書評でも、そこに

渡辺さんが、自分に妹がいれば、文学について彼女に語りたかった、と書き、そして妹のいなかった渡辺さんが、結果として、のちに、お嬢さんにむけてこれらの文学作品をこのように語りかけたのは、彼がそこに、おおかたの女性がその人生で遭遇するであろうほとんどのことを、すでに先駆的に読み取っていたからではあるまいか。だからこそ、自分の最も愛する若い女性に、その普遍的な知恵を授けたかったのだろう。いや、そこまで自覚的ではなかったかもしれない。しかし、直感的に、これは、妹に、あるいは娘に、要するに、若い女の子に伝えたいことである、また、それは語りかける方にとっても喜びでありうる、と思われたのであろう。

それはいかにも正しいのであった。渡辺さんがこの文章の受け取り手、と想定されていたお嬢さんと、わたしは同い年である。お嬢さんと同じように二十代初めに正しくこの本を手にとるべきであったのだ。おろかにも、この本の初版である一九八二年の日本エディタースクール版『案内 世界の文学』も、八九年の朝日文庫版『娘への読書案内』も、手に取ったのは、すでに四十を越そうかというところであつたわたしは、これらの小説から、また、渡辺京二という人から、ずいぶんと学び損ねて人生なかばまでをうかうかと過ごしてきてしまったのであった。

若い女性たちに、この本を手渡したい、と思う。小説を読んでごらん、と。あなたの

今の生きづらさのすべては時空を超えすでに先駆的に体験されているのだよ、と。そのようにあってなお、人間は生き延びてきたのであり、世界はいまだ続いている。悩みや苦しみはそのタイトルこそ変わっていても、本質的には似たようなものである。それでも人生は生きるに値し、生まれてきたからこそ、わたしたちは生きねばならぬ。究極の生の肯定が、これらの文学作品に流れ、また、渡辺京二という人にも流れていることを知ってほしいと思う。

生きづらい、若い人たち。あなたの孤独はあなたが初めて感じる孤独ではない。あなたのつらさはあなたが初めて感じるつらさではない。時を超え、場所を超え、あなたのつらさやあなたの苦しさはこの世界に生きる、あるいはこの世界を生きただれかによって、既に先駆的に語られている。あなたは、孤独であり、そして、孤独であるからこそ、それを求めずにはいられない。求めた先はまた荒野であっても、風が薫ることを知るだろう。ここにもあそこにも虹がたち、木々のざわめきが残ることを、渡辺京二という人が示してくれている。

*

「かたより」の感覚、自分は人とは違っている、という感覚。わたしのことをだれもわ

かつてくれない、という感覚。そのようなかたよりの自覚こそが人を詩や小説に導く。「トニオ・クレール」は、その感覚こそを軸にした物語である、という書き出しの、なんと魅力的なことだろう。ヨーロッパの小説によくある哲学的な面倒くさいところなど読み飛ばしてよいのだ、と渡辺さんは書く。そうだ、読み飛ばしてよい。いまのあなたにいらぬところは読み飛ばしてよい。いいかげんなようでも、そういう自分に即した読み方が、最もオーソドックスな小説の読み方であるという。

人を読書家にするのは、魂の飢えである。魂の飢えを別の形で満たせる人と、満たせない人がいる。満たせない人が本に向かう。からだを目一杯動かすことをたのしみ、ぽっかりと水に浮いて愉悦を感じられるひとは、別に本を読まなくても良いのだ。そのときあなたに文学は必要ではない。しかし、そのような人にもある日、魂の飢えが訪れないと、どうしていえよう？ 日々は生きるに苦しく、世はせつない関係に満ちている。わたしの愛したあの大きな木は無惨にも切り倒され、わたしのなじんだ日常世界は跡形もなく過去のものとなる。そのような日のために、一冊の本がある、とくりかえし、作品にのせて、この本では語られる。

本が指し示し、分け入ることができる知の世界。それが励ましであり、魂の飢えを満たすものである、と、たった今、書いた。日常のつらさが一冊の本によって相対化され、

すべてが自分のうちに豊かなものとして蓄積される助けとなる。それはまったくその通りである。しかし、同時に、引き込まれるその知の世界自体が、わたしたちのささやかな日常や、平凡な日々を代償として求めることもまた、知の世界に踏み込むものにはりつく宿命である、と記すことも、渡辺さんは忘れない。

第一部の最後にとりあげられるチェーホフの「黒衣の僧」は、何とも印象的な短編である（個人的にはこの短編とともにトルストイの民話集にある「三人の隠者」を、内容はずいぶんと違うのだが、いくども想起されるイメージとして抱え込んでもある）。知の世界のもたらす激しくも生々しい感覚とその昂揚は、人間が知る中での最も根源的な喜びにもつながる。そこに耽溺することは、平凡な日常と穏やかな日々を代償とする。知の世界に引き込まれることは、救いであるが、同時に、想像のつかない代償を求められることもある。しかし、いったん引き込まれたら、もう、戻ることにはできないのだ。人間はどのように生きるべきか、この世界はどのようにあるべきか、代償を払いつつも考え続けるしかない。その矛盾を引き受けることが、結局は文学を読むということでもあるのだ、と。

人間の生とは、分割しがたいなものかだ。だとすれば、文学はなぜ、思想を、哲学

を、歴史を包括してはいけないのか。生きるということは、それを全部、統一的に含んでいる。

そして、ひとりの生が分割しがたいとすれば、その生は、他のひとりの生とも分割しがたいはずだ。個人は、けっして原子的な個として、他の個人とかかわるのではない。個と個のかかわりの背後には、そのかかわりを可能ならしめている、人びとの共同的な交わりの世界があるはずだ。

そのようにしか、物事を考えられないのが、ロシアの精神である、と、第二部、ソルジェニーツインの章で語られる。いま求めてやまないものの本質が、それがロシアの精神であるというのか。それならば、どんなにか、ロシアの小説家たちの書くことにわたしたちはヒントを得て、おろおろとでも先に進んでいく何かを得ることができなのではないか。トルストイやドストエフスキの息づかいが感じられるような気がする。膨大なロシア文学をそのようにして、あらためて読み継ぎたい、と願うようになる。

これらの文学案内が、ローザ、ドノソ、カルペンティエールというラテンアメリカの書き手で終えられていることを、ブラジル、ノルデステ（北東部）、グランデ・セルタン（「大いなる大地」の原題）のかたわらで十年を過ごしたわたしは冷静に読むことはできな

い。日本でこの小説について、ノルデステについて、こんなふうに書いている人がいる、それは驚きであり、また、「この文章はわたしのために書かれたのだ」という大いなる思い込みによる愉悅を呼び起こした。思えば、すべてのすぐれた文章は読者に「この文章はわたしのために書かれたのだ」という錯覚を引き起こす。引き起こされたほうは、その思い込みがあればこそ、作者の膨大な作品をすべて読み尽くす、ということができるようになる。そのような道筋をもまた、この本は提示しているのであった。

この解説を書くことを機会に、ここにあげられているすべての本をそろえた。解説を書き終わるまでにすべて読み終えられなかったが、読まれることを待っているこれだけの本があることの、なんとという豊饒。インターネットの普及で古書も簡単に検索でき、日本中の書店や古書を持つ方から購入出来るようになった。ここにあげられている本を、その気になれば、コンピューターを前に、一夜ですべて探し求め、注文することが可能であり、数日中にはすべて手に取ることができ、それをあらためて書いておこう。そのような意味において、よき時代に在る。

*

渡辺京二さんは十五歳までの少年時代を大連で過ごした。活動弁士だった父は、その

ころには映画館を経営しておられたそうで、西洋の映画を幼い頃からたくさんみていたから「女性に対する感情は幼い頃から発達しておりました」とおっしゃる。当時、日本が植民地としていた満州。そこは疑いもなく異国であるが、そこに育つ日本の少年は、その時代、日本語を話し、日本語で教育される学校で、中国や、朝鮮や、白系ロシアの子どもたちと共に学び、日本語で読み、日本語という窓口から、世界を見た。そして、その短くも特異な、いまやそこにいた人の記憶にしか存在しないこの時代は、「西洋」の街で育ったのに、「日本語から世界を見る」、風変わりな、内面思考の深い少年をはぐくんだ。いわゆる日本の共同体的なものからも、はるかに遠い、植民地都市での暮らし。「僕」の原風景はラスコーリニコフの住んでいたような、屋根裏部屋。そこからのぞけば、パリやモスクワのような石畳の街並みが広がっている。僕はヨーロッパ人なんだね。そういう言葉を確かに聞いた。

ロシア人が作った東洋のパリ、大連。ひとつひとつの石畳と外に開かれた広場。パンのにおい。窓からの風景。アパートメントでの母と姉たちとの暮らし。多感で早熟。異国の街にあつて、それでいてつむがれる日本語と、日本の書物に埋もれるような日々。そして、その日常が失われていくということ。失った植民地から当然のごとく、去らなければならぬ植民者たちとその家族。十五歳の京二少年。

ある時期の日本が不可避的に生んだ、大連、というロシアふうの街で、日本語を繰りながら少年時代を送るということ。その、おそらくは、二度と歴史上現れることのない状況が、渡辺京二という人の無二の個性を彩る。西洋にあつて、書かれた言葉そのもので、その作品を読むのではない。丹念な研究のもと、心血を注いで端正な日本語に訳された西洋文学が、西洋の「辺境」たるロシア人のつくった街にあつて、期間限定の日本語教育を背景とする、ナイフのようなすどい感性をもつ一人の少年に、膨大な量を読まれていくということ。ある限定的な状況が生み出した、渡辺京二という人とその本の読み方に、人間の普遍性への憧れと真の人間理解にむけての励ましを得る。

思えばすべての人間の生とは、ある時代と土地の制限の上にある。ある個人の育つ特定の環境はいつも期間限定であり、だからこそ限らない光芒を放つものなのだろう。そのように思えば、渡辺京二という人のたどってきた歴史の、なんと限りなくいいとおしいものであることか。それは、その人の上に、この膨大な小説の書き手とその背景が、また積まれているからにはかならない。文学とは限りなく人間をいとおしむもの。そこに可能性がないなどと言える時代はおそらく人間の歴史がおわるまで、くることはないのである。

インが神と出会うということが必然だったわけではない。しかし、アーウィンでなければ誰かが神に出会う可能性があった。それは、かれら宇宙飛行士が「典型的アメリカ人であればならぬ」だったという国家イデオロギー的、民族感情的要請があつてはじめて可能性が強まる、ということである。立花隆の〈事実〉への追求はそこまで射程が及んでいるのである。わたしがルポライターの仕事として『宇宙からの帰還』をきわめて高く評価するのは、そのためである。

しかし、同時にいえることは、この『宇宙からの帰還』は〈私〉を徹底的に排除して、〈事実〉の中に入りこみ究明を行なっているようにみえながら、その〈事実〉を読者のほうに運んできているのは、やはり立花の〈私〉なのではないか。ただ、作者が職業的なルポライターであるため、その〈事実〉は〈私〉が再現したのだというような意識が薄い。立花はその仕事を他人がするよりもはるかに、綿密に、正確に再現する技術をもっていた、ということもできるのだ。

ところが、ノンフィクションのなかには、技術ではなく、〈私〉という磁場があつてはじめて事実が事実として確定したのだ、とおもわれるような作品がある。事実は事実として予めあるのではない。事実を事実として確定する〈私〉という磁場があるから、事実が

存在するのだ。石牟礼道子の『苦海浄土』（講談社、一九六九年。七二年改稿）などは、作品がそう主張している。同書が「わが水俣病」という副題をもち、その講談社文庫版解説「石牟礼道子の世界」（一九七二年）で、渡辺京二がこの作品を「石牟礼道子の私小説」とよんでいることの意味は、おそらくこれである。渡辺は次のように書いている。

実をいえば『苦海浄土』は聞き書などではないし、ルポルタージュですらない。ジャンルのことをいっているのではない。作品成立の本質的な内因をいっているのだ。つまり、それでは何かといえば、石牟礼道子の私小説である。

この文章は、篠田一士も肯定的に引用しているものであるが、にもかかわらず篠田はこれが「石牟礼道子の私小説」であるという読み方をまず拒否しろ、という。これが自律的な文学作品となったのは結果であつて、まずこの作品の特筆にあたっているのは「（つくられた）聞き書き」という点だろう、という、きわめてジャーナリスティックな見方をするのだ。そこでは、「つく」っているのが石牟礼道子の〈私〉であるということは軽視されている。